

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181 (代)
平成20年8月1日

年表で読む 古平の歴史

131

商工業 古平信用組合

(17)

戦後の大インフレがおきたこと

から、昭和二一年一月一七日「金融緊急措置令」が施行された。これは、日本銀行券預入令と共にとられた金融非常措置で、この日をもつて金融機関の預貯金を封鎖し、現金の支払いや融資をきびしく法令によつて規制したのである。

この法令はインフレを抑制するための一つの方法で、預金のすべてを一月一七日現在で封鎖（支払い停止）して払い出しに一定の制限をつけ、新しい紙幣（新円）を発行して、三月二日をもつて新円

と旧円の切り替えをするというものであった。旧円はすべて金融機関に預けて入れてこれを封鎖し、払い出しには制限が設けられた。

封鎖された預金の払い出しは、世帯主は月額三〇〇円、家族は一人当たり一〇〇円であつた。賃金などの支払いは五〇〇円までが現金で、これを超えた分は封鎖預金となつた。

新円と旧円の切り替えは三月二日までとなつていたが、新しい紙幣の印刷が間に合わないで、「証紙」という切手大のものを旧紙幣に貼つて新円の代わりに使つた。

町内の信用組合、郵便局、銀行では、一月二十五日から新円と旧円

の交換が始まつたが、どこの金融機関も押しかけた利用者で大変な混雑となつた。

△入舟支所の焼失と新築

昭和二十四年五月一〇日の大火で、入舟支所のほか金融機関では北海道拓殖銀行古平支店、古平郵便局などが全焼したが、それぞれ重要書類はすべて持ち出され、その後の業務への支障はなかつた。その後、入舟支所はいち早く店舗を新築し、同年一〇月二一日には業務を開始した。

△古平信用金庫に改組

昭和二十五年四月一日「中小企業等協同組合法」が施行されると同時に、今までの市街地信用組合法が廃止されたので、新しい法律によつて古平信用協同組合となつた。

そして翌年の昭和二六年一月

一日、金融機関としての信用維持と預金者の保護を図るため、新たに信用金庫法が制定され、この法律による認可を得て古平信用金庫に改組したのである。

同年一二月一日、国民金融公庫（昭和二十四年庶民金庫が改組）の普

通事業資金貸付けの代理業務の取り扱いを始めた。これにより信用金庫では、長期金利の国家資金を地域に導入することに努めた。

昭和二七年一一月三日、理事

長梅野富蔵は現在の古平信用金庫を設立し、地方金融界に多大の貢献をしたことにより緑綬褒章を受章した。

ところが昭和三五年一〇月二〇日、梅野理事長は旅行中に東京で急死し、同二八日、午前一〇時か

ら禪源寺において古平信用金庫葬が執り行われた。葬儀委員長斎藤

林蔵、喪主梅野潮太郎

△創立を祝う記念式典

古平信用金庫では、節目に当る年には記念式典や記念行事を行つてきた。

大正一四年一〇月二三日には創立十周年記念式典を行い、無限責任大典記念古平信用組合誌を発行した。

昭和一五年一〇月二二日、創立十五周年式典を古平小学校で行い、一般組員に記念品を配付した。

昭和一〇年一〇月二二日、創立二十周年記念式典を中央劇場で行

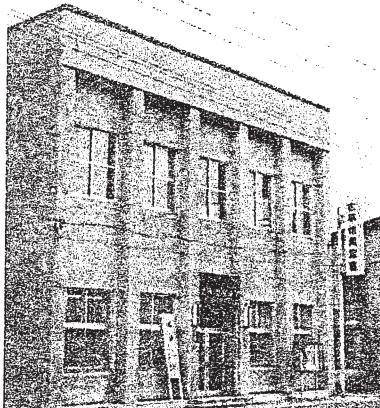
い、二日間にわたって組合員とその家族慰安の映画会を開いた。

昭和一五年一〇月一二日、創立二十五周年を古平小学校で行い、合わせて物故役職員の慰靈祭を執り行つた。

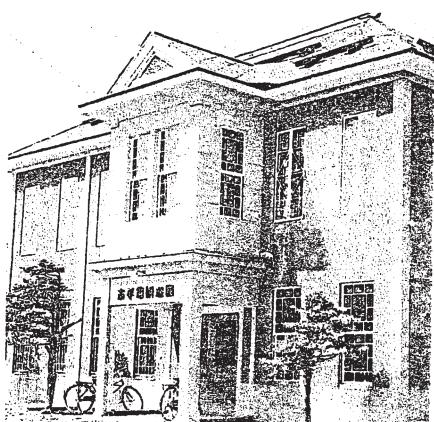
昭和三〇年一〇年に一日、創立四十周年記念式典を本店二階会議室で行い、四十周年記念誌と共に、記念品としてお盆を配付した。

◇本店の新築落成式

事業の拡大により事務所が狭くなつてきたことや、建物が大正一一年の建築すでに四〇年近くも経過している」とから、昭和三六年、



→ 売却した旧本店店舗



本店の建物を隣地の鶴谷電気店に売却し、鉄筋コンクリート二階建て、四三一・七平方メートルの本店を新築した。工費一、〇一七万円余りで同二七年一月落成した。

一月一三日、琴平神社山口宮司による修祓式を行い、同月一七日、大会議室において落成式と祝賀会が行われた。

新築の店内を一般にも公開したほか、記念行事として町内の児童・生徒の書画展示会が行われ、組合員に記念品が配付された。

本店の新築に当り『古平信金』より新築記念方も発行され、越中理事長はその中で、

→ 大正一〇年一月、現在地に事務所を新築してから三代目、昭和三七年落成した本店店舗

本店の新築に当り『古平信金』より新築記念方も発行され、越中理事長はその中で、

「あたかも信用金庫法制定十五周年の意義ある年を迎え、一層完備した金融機関の店舗として竣工させていただきましたことは、ひとえに皆様方のご協力ご支援の賜でありまして厚くお礼を申し上げる次第であります。(以下略)」

と述べている。

この年一月三日、入船支店が同じく新築落成した。

◇創立五十周年記念

昭和四〇年八月二三日、古平信用金庫創立五十周年記念式典が、新築して間もない古平小学校講堂で、四百数十人が列席して行われた。

古平信用金庫は道内の三三を数える信用金庫の中で、渡島・旭川両信用金庫に次いで三番目に歴史がある、記念式では功労者・永年勤続職員・総代(一〇年以上)・職員(一〇年以上)の表彰が行われたが、功労者として初代理事長故 梅野富蔵、専務理事 故 米田岩吉が表彰された。

また、五十周年記念として公共団体に総額一五〇万円におよぶ寄贈があつた。

（次号「古平信用金庫合併」を以てこの項終了）

五〇万円

消防番屋建設資金へ

積丹町 中島グラウンド鉄骨製野球バックネット 一基

公民館建設基金 三〇万円

古平町 稲倉石小学校 床上大形積み木 ほか八点

邦文タイプライター 一台

古平高等学校 郡人会保育所 ぶらんこ 四台

古平中学校 稲倉石小学校 大太鼓一個

明和保育園 プロパンガス その他

ほか八点

古平町 稲倉石小学校 大太鼓一個

明和保育園 プロパンガス その他

ほか八点



昭和三年 つづく

▼一〇月二五日

起床六時、まだ電気がついていない。今朝も農園行き。割合暖かい天気だ。天野さんは上畠のリンゴの木を切る。烟にしても水田にしても広々としてよい。熊さん九時頃来て隣の甚内さんとの境界線などを調べる。後、甚内さんが来て下水道を通すところを見て正午頃帰る。野口看護婦さんから悦三に手紙が来たので返事を出す。夜、十が来て、上畠へ水田をこしらえるので、酒井さんに頼みに頼み明日現場を見に行くことにした。

二五日午前零時、稚内で大火があり七〇〇戸余りが焼失せりとのこと。佐渡の大火にまたこの大火、実際に國家の損失であり、氣の毒なことだ。

▼一〇月二六日

今日は才太郎さんが桐の木を切る出面に、十と酒井さんが上畠に水田をこしらることに付き、現場を見に来る約束をしていたのでは五時起床、まだ暗い。火を

たきつけ、雨戸を開けていたら熊さんが来た。六時農園に行く、割合暖かい。天野さん、才太郎さんも間もなく来た。天野さんは上畠のリンゴの木を切り、私は才太郎さんと桐の木を切るのを見回る。六尺以下のが沢山あり、早く切って手入れすれば良いものがどれものに惜しいことだ。三角烟から切り始める。熊さんも来て、切った

▼一〇月一七日

起床五時半、薄暗い。私は気分によろしく、早起きするのがおつくなっている。大典記念に造田はかる見込みだ。大典記念に造田はよい事業だ。四時帰る。

高野名手作さんの日記から 当時の世相を見る

(138)

▼一〇月一八日

五時半起床、例の通り火をたき枝を集めたりする。こうして来年夏にバイが出たら、一本だけ残して秋まで伸ばし、その後、草刈りや芽搔きなど二、三年もしてやれば良いものがとれるのだ。明年は大切な年、忘れずにやらねばならぬ。昼食は早目に一〇時頃、ムシロの上で花をめでながら食べる。浮世の苦労を忘れて楽園だ。一

時に酒井さんと十が来て、上畠の水田にするところを見る。一反三〇円として、三、四反こしらえられるつもりだ。三〇日頃から取り掛かる見込みだ。大典記念に造田はよい事業だ。四時帰る。

時に酒井さんと十が来て、上畠の水田にするところを見る。一反三〇円として、三、四反こしらえに行く。明日あたり帰るだろうと行く。明日あたり帰るだろうとのことで頼んでおいた。函ハイカラ山紅葉でよい眺め、今日の天気は暑い程のよい日だ。こんな時に働いていると気持ちもよい。長吉のところの菊の花壇を見て一〇時半帰る。良い天気なので、裏の菊を鉢四つ程に上げて玄関に飾る。立派になつた。ダリヤの球根を掘り起こす。

五時半起床、例の通り火をたき板戸を開ける。六時頃農園行き。14号の烟を見たが、ここ桐も手入れをしていないので、切つてよい芽を出させるつもりだ。熊さん、天野さんが来て長イモ掘りを始める。小春日和のよい天気、菊の良いものを七株程掘り、裏の烟と鉢にすべく熊さんに担いでもらう、これで裏の花畠もずい分賑やかになった。今日は命日で、佐渡から送られて来た栗でご飯をたくられる。お経を上げ一〇時帰られる。私は月末の目録を書く。暖か

が買いに行つたとのことで、家でも49号三千斤程買いたいと頼みに行く。明日あたり帰るだろうと行く。明日あたり帰るだろうとのことで頼んでおいた。函ハイカラ山紅葉でよい眺め、今日の天気は暑い程のよい日だ。こんな時に働いていると気持ちもよい。長吉のところの菊の花壇を見て一〇時半帰る。良い天気なので、裏の菊を鉢四つ程に上げて玄関に飾る。立派になつた。ダリヤの球根を掘り起こす。

の値段だ。
この頃から小雨が降る。長らく良い天気が続いたので降るかも知れぬ。イカ大漁、一二〇〇からよい人は千ぐらいまでとれた。函館方面は不漁、大典を祝い値段もよろしく、スルメ一把八〇錢ぐらいとか。浜値は（一〇錢で）三バイぐらい

▼一〇月一九日

朝にいたるも降り続く。長らく天気であつたから、秋の始末も余程出来た。今朝もイカ大漁、値段がよいので浜は景氣良い。熊さんは雨で仕事を休み、月末の集金に出かけた。私は柴田さんの葬式送りに行く。雨は小晴れになつたが寒さが加わる。スケソ漁一一月一日から始まるとして、何れも準備に一生懸命だ。岩内から大仕掛けの製造屋が二軒来て、浜の元上田漁場宝海寺の方で工場の準備中、今冬は、スケソの加工品が古平名物としていろいろな品が出来るだらう夕方、裏の花壇の菊花を箱鉢に植えたり、切花にして花立てに立て

この頃から小雨が降る。表づく良
▼一〇月二〇日

起^ハ床^{六時}、熊さん^が來^て火^をたきつけていた。私は農園行^き。昨日からの雨、朝に^{なり}寒さ^が加わつてアラレ^{になる}。長ぐつに外套^で出^かける。天野さんはリンゴの木^を切つて^{いる}、あちこち見回り八時^帰る。途中、阿部円蔵の兄貴に^会い余市リンゴの様子^を聞く。49号^の上^が三錢^{一厘}、運賃^が五厘^{かかり}、古平着^で三錢七厘^{との}こと。一千斤程^{わけて}もらうことにした。古平に下駄屋^が来て、桐の木^を見て七〇本程^を一六円^で売ることにした。明春から秋まで手入れ^{をして}、よい桐の木^を仕立て^{るつもりだ}。九時^帰る。寒さ^が強い。朝ごはん^を食べてから熊さんは集金^{に出}かける。チラチラ雪が降り出し冬^が來^たようだ。子供たちはコタツ^{に入}つて^{いる}。夏中丹精した菊花^が盛り^{になる}。茶の間、玄関に五鉢、裏に五、六株、外に花瓶三本^に切花^を飾^る。初冬、雪^にも負けず、香り高く菊花^はよい。明年からますます精^を出^して作ろう。今日から新しく女中さ

▼一〇月三日

昨日来チラチラ雪が降っていたが、今晩は床の中でも殊更寒い。五時半頃、妻が目を覚まして戸外を見たら、ボタボタ雪が降り、屋根も道路も真っ白だったとのこと。起きて見れば、なる程一面の銀世界。昨日烟から持つて来るつもりの菊花七、八株、雪に合わせては大変と、早速長ぐつと外套で出かける。どこも真っ白だ。雪が菊に積もつていて掘るのに手が冷たい。ようやく板倉に入れた。ダリヤの枝を切つたりしたが寒いので八時帰る。運動したので朝ごはんがおいしい。昨日から女中さんが来てくれたので妻も余程楽になつた。熊さんは集金に出かけ、後、父と倉庫内でリンゴを選び囲いをする。本年のリンゴは虫食いが多く良品は不足だ。雪のため道路はザブザブ、いよいよコタツだ。外套、長ぐつとの時期になつた。正治はこの日二回も外に出ては、転んで泥んこになつて帰つて来る。海は時化で大型汽船三隻が停泊している。明日はスケソ船の出初めというが

二月一日

祝聖会の例会日、四時半起床、洗面後出かける。寒いこと寒中の如し、外套を着て行く。台所でたり五時半から読経、六時半終る。手が痛いほど冷たい、和尚の部屋で話す。一〇日は大典奉祝日ゆえ、一九日の例会を繰り上げ、一〇日五時にやることにした。七時帰る。熊さん、天野さんはリンゴの木を切るに農園行き。私は一〇時頃、菊花展覽会準備のため禪源寺へ行く、あちこちからきれいな菊花が沢山集まる。本堂へ大勢が手伝つて陳列、私は花へ着ける短冊形の紙に名前を書く。二百枚から書くのでなかなか忙しい。今日ははずい分と寒く手が冷たい。昼も夜食もお寺で食べる。その後、お互に出来の良い花を選んだが、こんなにも沢山あると目移りがする。切花の一本一〇銭と一五銭の中から七本買う。丹精込めて作つたのだから安いもの。一〇時頃ラジオを聞き、茶菓をよばれて帰る。手習いの練習にはよい一日であつた。今朝、大謀が大漁、大マグロ、

んが来た、名前はマツエさん。

この時代では出られぬだろう。

ブリ、鮭など三千円余り獲れたと
いう。小サバは全く無し。

ろか。

▼一月一日

起床七時、朝から雨が降る。そ
して寒いが昨日より凌ぎやすい。

今日は菊花展覽会の初日、昨日陳
列したのを見て何とも言われぬ美
観、何時まで見ていてもあきぬが
八時半頃帰る。間もなく妻と支店
のおつかさんが見物に行く、ずい
分長い間居て正午頃帰る。聞けば
本のおつかさんも行き、アレコレ
と売約の品定めをしていて手間ど
ったのだとのこと。誰が見ても菊
の花は良ものだ。雨で熊さんは農
園は休み。昼食後、妻と交代して
私も菊花展へ行く、売上帳の記入
係りをやる。ずい分と売れていく。
アメリカから秀逸品五本来た。四時
締め切つたが二百本の大部分が売
約、代金も二〇円余りだ。五時帰
る。明日は明治節なので風呂に行
く。サで町内の御大典奉祝協議
会がある。九時頃帰つたが、荒れ
模様なのか、湾内に汽船が九隻も
停泊している。スケソ漁が本日出
漁したが、五〇〇から三千ぐら
いのこと、まずは中漁といふこと

▼一月三日

起床六時、朝から雨が降り道路
が悪い。今日は明治節の目出度い
日だ。起きて久をだつこして浜へ
出で見る。沖にも汽船が停泊して
いる。九時から学校で拝賀式があ
るので行く。子供時代から一月
三日は天長節と言つていたが、記
念すべき良い日だ。これが明治節、
菊花の盛りの祝日になつたのはよ
いことだ。新調のお写真を拝観し
て一〇時終る。多くの人は禪源寺
の菊花展覽会へ行く。私もそのま
ま行き、売約品についての帳簿を
調べたりしたが忙しい。午後一時
頃までに二百点全部を売り尽くす。
総代金三三円余りだ。午後一時半
帰る。二時頃から俄かに暴風雨、
大時化となる。港内の発動機船は
皆警戒、ロープなどと騒いでいる。
五時頃、桐沢方へ菊花展慰労会が
あり行く。会計など調べた後、五
時半から酒肴などが出たが沢山の
料理だ。芸者も三人来る。八時に
散会し帰る。

起床七時、昨夜の菊花展の慰労
会は和氣あいあいの宴であつた。
第一回の菊花展覽会であつたが、
菊作りの人も一般の人も余程興味
を持たようないので、明年の第二
回展覽会には出品も相当増えるだ
ろう。私も今秋中に裏に花壇をこ
しらえ、明年は本式に熱心にやつ
てみる。そして明秋にはよい菊花
を出品したいものだ。この朝、展
覽会で買った菊花一〇本程をお寺
から持つて来て、大、中の花瓶に
挿したら見事であった。御大典ま
では楽にもつ。当日、天皇陛下の
御真影にお供えするのだ。今日は
軍人分会の射撃会、幸い晴天にな
つたので、私はダイマルと山下さ
んらと弁当を持って見に行く。晩
秋の野山は景色がよい。カモイギ
の射撃場に着いたら、盛んに発砲
している。終つて昼食にブリ汁を
二時、帰りに家の松山に寄つて見
る。ブドウつるなどここ二年間は
刈つてるので、割合よく生長し
てゐるが、ナタであちこちのつる
などを切つてやり、四時頃帰途に
つく。途中、酒井さんに寄つたら、
わが家の水田をこしらえるのに行

つてゐるというので、行つて見た
ら五人でやつてゐる。明年はここ
から新米を見るによいだらう。御
大典記念造田になつた。五時家に
帰る。

▼一月五日

起床六時半、割合暖かく良い天
気だ。熊さんは天野さんと農園行
き。この天気に仕事に一生懸命だ。
上ナギ、上天気なので小樽通いの
船も来た。今朝の新聞によれば、
三日午後の俄かの暴風で、岩内の
スケソ船が難破し、一〇余人の漁
夫が溺死の由、氣の毒なことだ。
一〇時頃、久し振りで新地町方面
へ自転車で行く。スケソ漁期に入
つたので、その支度で活氣づいて
いる。帰途、ヨに寄りしばらく話
し正午帰る。午後から妻は農園行
き、私は本へ行き、御大典記念樹
として桜や花梅などの苗木を六本
貰う。早速農園へ植え付けるつも
りだ。妻は夕方帰る。今日はネギ、
長イモ掘りから、ダリヤの根掘り
までやつたとのこと。水田の方に
は酒井さんら五人が来てやつてい
ること。明日見に行くつもりだ。
夜は禪源寺のお寺参りで、妻

や子供たちが行く。今は菊の花盛り、茶の間には先日買った大輪七本を始め、私の作った鉢植え七つ、裏の千本菊などが満開、菊花は実際に高くよいものだ。明年は熱心に作るべし。

▼一月六日

起床六時半、晚秋の空は晴れてよい天気が続く。御大典も間近かくなつたので、呉服店や小間物屋などでは売り出しをしているところもある。国旗など買って行く人も見える。熊さんと天野さん、この天気なので農園から荷車で土三台と、馬ふん一台を裏の花畠へ運ぶ。明年の菊作りの準備だ。花壇をよくこしらえて、明秋はよい花を咲かせるつもりだ。運動と精神、そしてよい楽しみだ。店はスケソ、イカなどでボツボツ忙しい。父もこの頃は気分よいとて元気だ。久し振りで夜二時間ほど手習いする。これからは毎日二時間ぐらいやるつもり。

◎御大典奉祝 晚秋の空高く菊花薫る今日六日こそ、天皇陛下御一代御一度の代儀式であり、大祭祝である。御即位の御大典を挙

げさせ給うため、神器を奉じさせり、由緒深き京洛の地へ行幸あらせられる日である。

(以下『北海タイムス転記』とあります、長いので省略)

▼一月七日

起床六時、洗面早々十まで自転車で行く。水田をこしらえているところと、原田さんの畑の境界のことにつき話に行く。朝食をよばれ八時帰る。この頃から雨が降り出す。禪源寺ではお寺参りがあり、ゴーンゴーンと鐘が鳴っている。昨日出発の天皇陛下、名古屋で二泊、今日京都へお着きになるのだ。東京を始め、日本各地は奉祝のため大変な賑やかさだとのこと。恙無く御儀式の終えられることを祈る。午後から禪学会があるの二時半お寺へ行く。菊作りの話などして、三時から禪学講話がある。なかなか修養になるよいお話をだつた。五時夜食を出され、五時半から本堂で読経がある。終つて説教があり、八時半家に帰る。

困で今日からラジオを据えつけたので、近くの人たちが皆珍しがつて聞きに集まる。私も行き九時半

帰る。

▼一月八日

起床六時半、まだ電灯がついている。今日原田さんと、上畠の水田になるところの境界の立会いをする日になつているので、朝食後七時半に出かける。天氣もよく割合温暖で、酒井さんへ渡した水田も二反歩程出来た。第二灌漑溝も出来たとのことで、明年の水は大丈夫というから、来年はこの新田から米がとれるだろう。御大典記念のよい仕事だ。岩内へ注文していたブドー苗本日着た。八時半頃、原田さん、十さんも来る。

いろいろ交渉の結果、原田さんは奉祝のため大変な賑やかさだとのこと。恙無く御儀式の終えられることを祈る。午後から禪学会が同じ種類は同じところに植え付けられた。菊花約二四、五種類ある。今は秋菊が盛りだ。一生懸命手入れをし家に帰つたら二時であつた。仕事を夢中で昼も忘れていた。夜支店主人が来て極楽金剛書頼まれる。手習いの稽古のつもりで書いてみよう。困でラジオを聞く、父も気分が良いとて一緒に聞きに行

く。熊さん、午前中自分のところの納屋場をこしらい、午後農園へ行く。

▼一月九日

起床六時半、まだ電気がついている。天野さんが来たが雨模様もあり、裏の花畠の整理をする。石を取り除くのに熊さんと私も取り掛かり、三人でようやく取り除けた。これで花畠もよくなつた。八時頃阿部兄さんが来て、頼んでおいたリンゴが着いたというので、49号リンゴを受け取りに行く。運んで来たリンゴを三人で選び倉に入れた。一斤四銭で買う。一〇時頃から雨がだんだん強くなる。午後から熊さんは新地方面へ青物、ネギ、ナシなどを配るに行く。いいよ明日から御大典で、いろいろと支度で忙しい。夜、困ヘラジオを聞きに行く。店には盆栽を沢山陳列してある。九時ダイマルへ行く、明日、娘の三十五日なので花を持参し、一〇時帰る。雨も次第にアラレが交じり空は真っ暗、明日の天氣は如何、晴天でありたいものだ。地方の饗饌資格者※が新聞で発表になる。古平では高

野・山口・仲谷・米田助役だ。軍人、教員などは別だ。明日は禅源寺で特に五時から、天皇陛下万歳の奉祝で読経があるので一時休む。

※饗饌＝きょうせん・もてなしをするお膳のことがだが、ここでは天皇陛下が功労者を食事に招くこと。賜餐（しさん）

▼一月一〇日
千載一隅のめでたき御即位式当日だ。お寺の鐘がゴーンと鳴つたので目が覚めた。起きて時計を見れば正五時、早速洗面、支度をして祝聖会に出かける。町はまだ真っ暗だ、チラチラ雪が降つていて寒い。宝海寺、禪源寺共にゴーン、ゴーンと百八つの鐘を撞いている。第一番目だった。台所で話しているたらだんだん集まって来た、六時から読経が始まる。この朝は特に莊嚴に聖寿万歳を唱えた。七時終わり、和尚の部屋で供物のマンジユウなどを頂く。九時から小学生を始め有志の旗行列があり市中はお写真を飾り、菊花やリンゴ、お酒、お餅などを供え、聖寿万歳を

をするお膳のことだが、ここでは天皇陛下が功労者を食事に招くこと。賜餐（しさん）

ウチン行列がある。この日はチラチラ雪が降り、いよいよ冬景色となり寒くなつた。家では紅白のおはぎをこしらいて祝う。生徒は紅白のマンジユウを貰つたとて大喜びで帰る。向かいの電気会社では紅白の花電球をつけきれいだ。店は店に盆栽を陳列、ラジオを店に出している。

▼一月一一日
起床七時、昨日からの雪、今日も降り続いている。起きて見れば道路も屋根も真っ白で三寸ほども積もつてある。寒さもきびしく寒い。中のようだ。今日は命日、妻は仏前での支度に忙しい。一一時、和尚さんが来られる。妻は学校で婦人会があるとして困のおつかさんと行き、三時頃帰る。聞けば、大勢集まり、駆走もあり、奥さん連中のかくし芸が続出、ずい分と賑やかである。氣の毒なことだ。人間何時ども

女中さんをしていたハル子さんが遊びに来て、皆といろいろ話をしをし泊した。夜、函へラジオを聞きに行く。帰つてから大阪の豊吉さん、日高のお京さん、小樽の高野勇次郎君へはがきを書く。幸治からはがきによれば平から柿を小包で貰つたとあるので、礼状を出した。雪は夜に入つても止まない。

▼一月一二日
起床六時半、今日も寒さがきびしく、チラチラ雪が降つていて、も降り続いている。起きて見れば道路も屋根も真っ白で三寸ほども積もつてある。寒さもきびしく寒い。中のようだ。今日は命日、妻は仏前での支度に忙しい。一一時、和尚さんは板倉の片付けなどをするとして、弁当を持参で農園へ行く。この日聞けば泥の木の金沢さん、熊さんは板倉の片付けなどをするとして、弁当を持参で農園へ行く。この日聞けば泥の木の金沢さん、一〇日の御大典祝賀会の帰り、酒の機嫌はどうしたもののか函の畠の川端に、一〇日の夜から一日の昼頃まで寝ていたとのこと、キツネに化かされたのではないかなどと話していたが、今危篤だとこのとおりである。

女中さんをしていたハル子さんが遊びに来て、皆といろいろ話をしをし泊した。夜、函へラジオを聞きに行く。帰つてから大阪の豊吉さん、日高のお京さん、小樽の高野勇次郎君へはがきを書く。幸治からはがきによれば平から柿を小包で貰つたとあるので、礼状を出した。雪は夜に入つても止まない。

▼一月一二日
起床六時半、昨日からの雪も晴れ、寒さも少しうるんだようだ。道路は雪が消えた後グチャグチャしている。余市通りの自動車は、滑り止めに車輪にクサリを巻いて走っている。天気を幸い熊さんと裏の花畠に板で二間と四尺の囲いをし、明年の菊作りに備えて馬ふん、油粕、土を混せて囲う。こうしておいて来年切り返しをし、この土に植え付ければ立派な花が咲くのだ。今日は上ナギ、支店の兄さんと姉さんが船で来るというので、妻が出迎えに行く。私は酒井かじ屋の老母の葬式送りに行く。勇丸が小樽へ行くので、幸治ヘリシゴなど送る。夜、函支店へ兄さんが全快して帰られたのでお祝いに行く。三ヶ月振りであった。少し暖気になつたので寝ぎよい。向かいのやぶ長では、青年連中がカルタ取りをしていて元気な声が聞こえる。九時から一時まで手習いする。



（続く）

II 一膳箸(いちせんばし)の船印

8

は勤まらなかつた。

※ 冥加金||もともとの意味は、神仏から受けるおかげ、神仏の加護に対する謝礼として、社寺

ン・串貝・干タラ・カスベ・ホッケ・サメ油・イリコ・アワビ・アキアジなどで種類も多くなっている。

恵比須屋岡田家が、フルビラ場所を知行主と契約書を交わし、

場所請負人となつたのはいつ頃か

明らかでないが、宝暦二三年（一七六三）、五代岡田跡三右衛門の

遺言状によると、岡田家は享保

一四年（一七一九）までは大松前
に本店と荒物店を待つて、いそが、

その年火災に遭つてから小松前

に出店を設けたとあるので、当時はまだ湯所精舩を「いなが

時じに大坂所詣をしていたが、たとも考へられる。

初め岡田家はフルビラを商

場（あきないは）としていた

惠比須神社（現在の厳島神社）を

創建しており、この年フルビラ場所と合わせ岩内場所を請負つて

いる。

・次にあるのはフルビラ場所のものではなハが、この頃の商場所の

契約書は、」のようなものであつた。

▽ 商場証文之古又(古又ニ)と
一、西暦より一カ年につき下判四

一四五年（治承）五月四日小糸

「このような上納金、冥加金(※
みよがきん)などは「ことあるご
とに請負人に課せられ、相当の
資力がなければとうてい請負人

竹屋辰左衛門殿 千五百両宛
献納したとある。岩田金蔵は美
国・積丹の請負人、竹屋辰左衛門
は余市の請負人である。

殿様御不如意御時節柄につき
各の如し、もつともこの時、

同二年 金七百五十両上納
同三年 金七百十両上納
べて金三千三百両

藩 主に対する献金も度々あり、記録に残っているのを見ても多額な金額である。

安政四巳年（一八五七）の「岡田正庸松前要記」にも、それぞれ献納した金額が記されている。

日本と世界の歴史と 世界の日本と

藩主に対する献金も度々あり、記録に残っているのを見ても多額な金額である。

宝暦一二年（一七六二）、松前資広が参勤交代の費用に充てるため、松前、江差に店舗を持つ両浜商人一同に一千両の御用金を命じたが、組中の二四名にこれを分限に応じて割り当てた負担表を見ると、当時の岡田家（五代弥三右衛門秀悦）が最高額であった。

一、八十八両 岡田弥三右衛門
一、八十三両 建部七郎右衛門
一、八十二両 田付新助
一、八十二両 平田与三右衛門
一、八十二両 卷淵勘兵衛
一、八十二両 西川市左衛門
一、六十二両 新川伝右衛門

安政四巳年(一八五七)の「岡田正庸松前要記」にも、それぞれ献納した金額が記されている。

安政元年八月	金千五百両
同年	金三百両 御手元
同二年	金七百五十両上納
同三年	金七百十両 上納 べて金三千三百両

殿様御不如意御時節柄につき各の如し、もつともこの時、

岩田金蔵殿 一千二百両

竹屋辰左衛門殿 千五百両宛
献納したとある。岩田金蔵は美
国・積丹の請負人、竹屋辰左衛門
は余市の請負人である。

このような上納金、冥加金(※
みようがきん)などはことあるご
とに請負人に課せられ、相当の
資力がなければとうてい請負人

は勤まらなかつた。
※ 真加金||もともとの意味は、
神仏から受けるおかげ、神仏の
加護に対する謝礼として、社寺
に奉納する金銭のこと、または、
商売をしている者が、幕府や藩か
ら営業を許され、また保護を受け
たことに対する献金だつたが、
のちには財政難から、営業者に
課した上納金のこと。
ン・串貝・干タラ・カスベ・ホ
シケ・サメ油・イリコ・アワビ・
アキアジなどで種類も多くなつ
てゐる。
恵比須屋岡田家が、フルビラ場
所を知行主と契約書を交わし、
場所請負人となつたのはいつ頃か
明らかでないが、宝暦一三年(一
七六三)、五代岡田弥三右衛門の
遺言状によると、岡田家は享保

岡田家の事跡を訪ねて 近江八幡市から

女性コーラスグループ
みづぐち

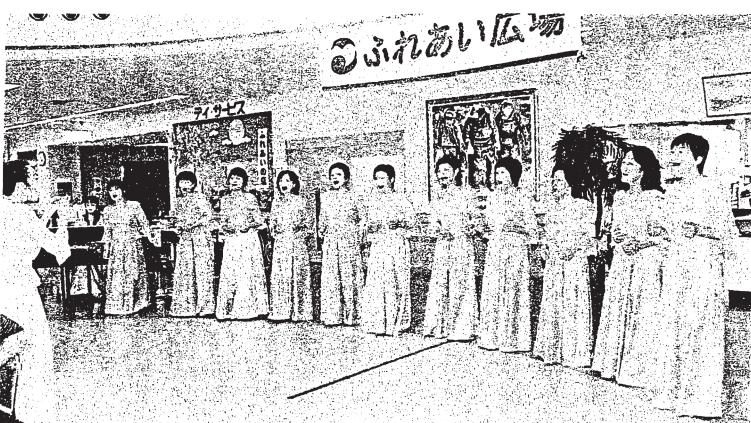
来町

ハイミッショコール
と共に・交歓会

このように定めます。前年八月中には運上金一ヵ年分を支払います。その上で来年(酉年)から船を用意しますが、夷人(アイヌ)に非道なことはいたしません。差荷(目減りを見込んだ分)については別紙の通りお請けいたします。

(続く)

← コーラス・みづぐちの一行



古平町の歴史を調べて行くと必ず突き当たるのが、古平の場所請負をしていた近江商人・岡田家とのかかわりです。このような商人は、ある時期には全道で七十人を超えていたといわれますが、古平場所のように一五〇年余りも継続して、歴代その事業にかかわってい

たところのはほかにその例がありません。岡田家初代の出身地である近江八幡市(昭和二九年町村合併により現在の市となる)では、その昔、北海道で成功した郷土の実業家として称揚されていて、滋賀県内の大学や、民間の団体などいろいろと研究されています。

今から七年ほど前にあ、当時



→ ハイミッショコールの歌声

の市長、助役(退職されたさうですが今回も同行)、市議、市史編さん関係者が古平町を訪問しております。今回は市民団体として、かねて交流のあった古平町のコーラスグループ「ハイミッショコール」との共演と、郷土の先人の歴史の跡を体験したいという目的で来町されました。

当日は、福祉センターで高齢者のティサークスなどもあり、来場者の慰安をかね、約一時間にわたって洗練された歌声がホールいっぱいに響きました。特に聴衆と一体感のある演出に、すっかり和んだ雰囲気に包まれたようでした。歓迎に大忙しのハイミッショコールとの共演もあり、いつそう会場も盛り上がりました。

終つてから交流会が催され、夕日の落ちる時刻、見送りを受けて次の予定地である一セコに向けて出発されました。が、好天にも恵まれ、有意義な交流の一日でした。

近江八幡市の皆さん、遠路はるばるじいおひまでした。

町内の学校探訪

[12]

古平小学校

て、其職に當る者の既に知悉する處なるに拘わらず、近年往々児童を殴打し、校下の避難を受くる者あるを聞くは、教育上洵に遺憾とする處にこれ有。教師の児童を懲戒する、固よりこれを矯正するの目的と外ならずと雖も、処罰の制限を脱し法規に触るるに至つては、既に感情に狂し、常識を逸するの行為にして、教師たるの対面を汚すの甚だしきものと云わざるべからざる儀にこれ有り不都合の次第に付、爾今一層注意これ有りべく

何点かの応募があつたが、保護者

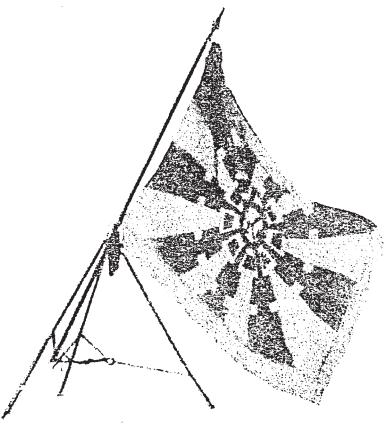
会や教員による審査の結果、當時高等科二年に在学していた吉田由雄の図案が採用されることになり、

第一〇回卒業生からの醸金一五円を基金として校旗を作製した。

(戦後に新しく校旗が制定され作

製されたが、この時の校旗はそ

後不明である)



◇卒業式に不参加

大正二年、第一九回卒業式を迎えたが、学校として前代未聞の事件が発生した。

卒業生である野呂襄、吉田由雄（後の吉田一穂）外四十余名は卒業式に出席せず、一同は禪源寺に立てこもつたのである。その理由

は、渋川正記訓導が児童に差別をつけ過ぎるというもので、出席したのは津田精、北橋八郎外七、八人に過ぎなかつた。山本藤造校長外が説得に努めたがこれに応じようとはしなかつた。中の一人である吉田由雄（後の吉田一穂）は一緒にいた仲間に饅頭やあんパンな

◇児童の体罰通牒

小学校始まつて以来といふ、児童の卒業式不参加と言う事態が起きたが、この年、後志支庁は各町

村長や戸長に次のような通牒を出した。

児童体罰に関する件

小学校児童に体罰を加うるを許さざるは、法規の明示する処にし

◇校旗制定

古平尋常高等小学校も創立以来すでに四〇年を経過し、教育環境も充実が図られてきたことから、かねてから校旗制定の機運が高まつていた。

大正二年（一九一三）三月、その要望を受けて校旗の図案を教員、児童から募集することになった。

◇トラホーム予防と検診

当時は一般家庭の暖房として、厳寒期に入る頃までは炉辺での焚き火で暖をとることが多く、焚き火の煙が家の中にこもつたり、洗眼の手拭いなどを共用する家庭があつたりと、生活での衛生観念が不足なのが眼疾が多かつた。また伝染病なども発生して、学校や町

内の消毒などが行なわれる」ともあつた。

この頃はなぜか海岸地方にトラホーム患者が多く発生する傾向があつた。明治四〇年には府令が出され、春秋二回以上、一般町民と児童のトラホーム検診を行わなければならなくなつたが、児童の罹患数はほとんど減らないのが実情であつた。

一般町民にも患者が多く、児童への蔓延を防ぐためにも明治四年、町では教師に簡単な洗眼方法を医師から修得させ、洗眼器具を設備し、軽症の児童に限り洗眼をさせた。この方法はその後も続けられたが、罹患者は余り減らなかつた。

町では衛生費の中に、初めてトラホーム予防費を計上したり、家庭状況によつて治療費を援助した。

大正二年から学校医の手当てを増額し、トラホームに罹患した児童の治療に当つた。沖・群来小学校と鴨居木教授所の児童の軽症者についても洗眼器具を設備し、洗眼や点眼をさせるようにした。また健康者の左腕に徽章を付けさせ、予防と治療への関心を高め、特に

家族の手拭いの共同で使用しないよう注意した。この検診は昭和になつてからも継続された。

◇積丹岳登山

一般の町民の中にも、早くから大正七年七月、町内で麻疹が流行し、特に尋常四年以下の児童の発生が多いことから、新校舎と旧校舎の行き來を禁止したり、一部校舎を閉鎖して予防に当つた。

◇薪から石炭ストーブ

学校では暖房のすべてに薪ストーブを使用していたが、大正二年、今後は石炭ストーブに切り替える方針で、初めて校内で四個の石炭ストーブを使用した。これは石炭を使用するほうが安価につくためで、沖小学校にも一個配置された。

◇第一次世界大戦

大正三年、第一次世界大戦が始まると共に日本もこれに参戦した。同七年、戦争はドイツと連合軍との休戦協定の調印により終つたが、これによつて国家主義的な教育が強化され、教育勅語などに関する講話会や、戦争へ向けての講演会がしばしば開かれるようになり、

父兄も參集するよう仕向けられた。 ← 古平の高台から見えたる春の積丹岳(右)と余別岳

一般の町民の中にも、早くから積丹方面への船や徒步による見学旅行が行われていたが、大正三年、先生二人が高等科男子生徒一五六人を引率し、積丹岳登山を行つた。後に、参加した生徒の談話を記録したものによると、各自毛布一枚、米五合、金一〇銭、ラップ二丁を持ち、先生は日本刀を背負い、晴雨計を持ち、土曜日の正午に古平を出発し、美國町婦美の団子茶屋に一泊した。翌日曜日は晴天に恵まれ、握り飯を持参し、団子茶屋の主人を案内人として出發した。一〇時頃八合目辺りで海霧に覆われ、やがて大雨となり全身

ずぶ濡れとなつたので、先生の指示で生徒は案内人と共に下山したが、途中で道を踏み違い、川沿いに降りて午後四時頃野塚に出て、そこから団子茶屋に戻り一泊した。頂上を目指した二人の先生は夜になつても戻らなかつたので、四、五人の生徒が団子茶屋に残り、ほかの生徒は古平に戻り山本校長に知らせた。先生二人が積丹岳で行

方不明になつたといふことで、古平から消防組や青年団員ら四、五〇人が捜索に向つたが、発見できずに下山した。だがその日午後三時頃、二人の先生は近くの小樽茶屋に無事たどり着き事無きを得た。二人の先生も道を間違えたもので、夜は抱き合つて身を寒さから守り、山ぶどうを食べて空腹をしのぎ助かつた。と伝えている。(続く)



お寿司と歌友

大澤文子

するものが常だった。

例年になくいち早く猛暑の日々が続き、小庭には真紅系統の花ばなが、炎天下にわがもの顔に咲き誇っている。

常に体温の低い私には苦手の猛暑である。
氷のかけらを口にふくみ猛暑の日々を乗り切ろうと思い、一粒の雨でもわが掌に降れよ」と願う日々である。

そんな時、ふと想いだすのは…とおいあの日、あの頃のこと…お墓参りの時季になるとなぜか必ずといっていい程、どしゃぶりの雨に見舞われる日々、「ほんとに…ほんとにねえ、お墓参りなると降るんだものネエ」姑(はは)はいつも小声で呟くと、わずかの晴れ間を見つけてお墓参りに出かけるのが常だった。

私もその頃はまだ幼かった次男ネンネコを着、姑(はは)のお供ををおんぶして、夏むきの花模様の「ワアーお元気でよかつたアー、うれしい」と一言！

やはり短歌会に出席したこと、初会の時、会長(大澤)から三省堂出版の国語辞典を全会員に配布してもらつてうれしかつたこと八月近くになると、いつも年中行事の一つとして姑(はは)のお供をしていたあの頃のことをフーツと懐かしく想いだすのだった。

夏陽に弱い私は今年の遠出は…無理かなと思いつつペンを持ち続けている…が、この暑いさ中のある日…うれしい」とがひとつ！この暑いさ中なのに…懐かしい歌友のふたりが、「こ機嫌伺いよ」と言つて、午前十時半頃、突然！手押し車を押しながらやつて来られたのだ。

「ワアー！ うれしい！ 早く早くお部屋へ来てよ」幼な児のように叫ぶ私を見て歌友のふたりは、やや経ち注文のお寿司が届いたが、今度はお箸を片手に…、共に苦笑した古い時代のことどもに及ぶ。私が、今度はお箸を片手に…、共に苦笑した古い時代のことどもに及ぶ。歌友の話しが尽きることがなかつた。年月を経ても忘れることがなく涙する歌友の話しが、こみ上げてくる涙をかくすこととは出来なかつた私だつた。

歌友もやはり同じことなのでしょう。僻地に住むことになつたので同じ天秤棒の話しが及ぶのだった。みんな若い頃の想い出は同じなのねえ…と、お寿司をつまみながら言う。だけどねえ…つらかつた話はやめただけ。歌友とお寿司をつまみながら、泣いたり笑つたり…。久々に歌友とお寿司をつまみながら、泣いたり笑つたり…。この夜、日記にする。

さあそれからが大変！

いつもの「海鮮丸寿司店」のカタログを広げ店に電話をかける。注文品の届くあいだに種々話話しに花が咲く。

私共も昭和二十一年春の頃、余市から船に乗つて大澤家の招きに応じ古平へ越して来たつけない時代。

大変だったなア…、フーツと悲しくなる。歌友のふたりもやはり田舎へ嫁いだのであろうか。天秤棒のはなしに及び、フーツと悲しみども…。今でも大事にして忘れることがないと言う。

あれから会員と共に短歌の勉強にはげんだ」とども…。その成果を平成十三年四月に合唱歌集『リラの街』として、満七年間勉強した全会員の成果を出版した」と…等など、涙して話す歌友の話しが尽きることがなかつた。年月を経ても忘れることがなく涙する歌友の話しが、こみ上げてくる涙をかくすることは出来なかつた私だつた。

やや経ち注文のお寿司が届いたが、今度はお箸を片手に…、共に苦笑した古い時代のことどもに及ぶ。私が、今度はお箸を片手に…、共に苦笑した古い時代のことどもに及ぶ。歌友達だが、やは

り水道、ポンプも無く苦労したこの夜、日記にする。

本州地区稻倉石会

越中富山に集う

富山市 高橋 藤藏

(元・稻倉石鉱業所勤務)

従来、東京で開いていた本州地区稻倉石会は、平成十一年以降、会員が居住する地区でゴルフを楽しみながら開催することにし、以来千葉・一ノ関・天童・古平・仙台・酒田・東京・日向と巡回し、今年は富山がしんがりの開催地となりました。

富山には、稻倉石からの転勤永住者が七名いるのですが、うち三名が故人となり、時の星霜を感じられます。

今年は、七月十六・十七日の両日開催したのですが、ここ富山は、参加常連会員の方は交通の便が悪く、とりわけ九州からは、空路で宮崎→羽田→富山と乗り継ぎ、東北地区からは、最寄りの新幹線駅→大宮→越後湯

沢→富山と乗り継がなければならず、老齢真っ只中の会員にとっては、好適の開催地とは云えない所だと案じていたのですが、いざ蓋を開けてみると私の杞憂は吹っ飛び、招待者を含め二十七名が参加されました。

第一日目(七月十六日)は、午前中にゴルフ会・午後は富山工場見学、そして夜は富山観光ホテル(温泉付き)での飲み放題の大宴会となりました。

今回の特色は、会員と富山の招待者とが、数十年振りに再会を悦び合った事でした。

- ・兄弟鉱山だった松川鉱業所の管理職グループの再会
- ・稻倉石から酒田大浜工場に転勤した時の、同僚グループと

の四十数年振りの再会。

ギリシャ進出時の、派遣技術者グループとの三十数年振りの再会。

稻倉石で別れて以来、五十年振りに再会したご婦人グループ。

日向工場の建設と操業に貢献した、技術者グループとの四十余年振りの再会。

など、まるで再会のために集まつたかのように、往時を偲んでの談笑・談葉が延々と続き、「二度と会えないと思っていたのに」

という会話の連発が会場を包み

も名残を惜しんでのお開きとなりましたが、新しい友情が彷彿と蘇つたのが大きな収穫となりました。

お開きの後は、幹事の部屋で車座になつての二次会が深更まで続き、飲みつかれたご老体をゴロリと横たえ、莫睡の朝をむかえました。



さながら『再会ショー』とも云える、懐かしさ一杯の宴となりました。

私たちの集いは、稻倉石鉱山で培われた絆をより深め、会員相互の親睦をはかる事を目的としていますが、今回は更に、若かった働き盛りに、自分の持てる知識と能力を会社の繁栄に傾注し、互いに援け合い励まし合つた同僚との再会を成し得た事が、富山開催の特筆すべき一つであつたと思います。かくして、延々と続いた宴席も名残を惜しんでのお開きとなりましたが、新しい友情が彷彿と蘇つたのが大きな収穫となりました。

お開きの後は、幹事の部屋で車座になつての二次会が深更まで続き、飲みつかれたご老体をゴロリと横たえ、莫睡の朝をむかえました。

一日目(七月十七日)は、富山の美術館・豪農の邸・北前船回船問屋を足早に回り、懐かしの友と会え、楽しかった思い出を土産に、来年は箱根での再会を約して帰途につきました。

——昭和6年の新聞から——

マグロが群衆だ！

昨年に引き続き古平でマグロ大漁 浜は練場を思わせる大盛況

このところマグロ漁も低迷していましたが、昭和6〇年、久し振りの大漁に沿岸の漁村は沸きました。

九月末から一〇月にかけて日本海北部を南下する、二百キロ以上のマグロが半島西岸の大謀網に思わず大漁をもたらしました。て古平漁協では一一月末まで二百トン余りを水揚げし、金額にして六億二千万円余りにもなりました。余市の中水試によると、後志管内で百キロ以上のマグロが実に五百本以上も揚がり、これほどの大漁は四十数年ぶりとのことです。

今年のマグロは対馬海流に乗つて

北上中のもので、丸山岬、セタカムイ沖では好調で、七月初めまでメ

ジマグロが約一〇トン、中には百キロを超えるものも一本あり、金額もすでに二千二百万円に達したとのことです。この調子だと、北上したマグロが南下して来る秋まで漁が続くのでは、と関係者は今後に大きな期待を寄せています。

マグロ水揚げ順調

今年も活氣づく古平漁港

一方、中央水試では、「今年は資源量が少ないようなので、昨年のような極端な大漁は見込めないかも知れないが、これはあくまでも未知数」とのことでした。

ところが、一月になると、がぜん古平、余市、積丹神岬の各地ではマグロの大漁が相次ぎ、どこも浜は大

今では遠くなれた戦前は、マグロというは割りと安い魚でした。生寿司という調理も一般的ではありませんでしたし、家庭ではむしろ脂のつたブリを賞味し、カレーライスの肉の代りとして重宝していました。食の世界も大きく変わりました。

2日で1万7千本

マグロ

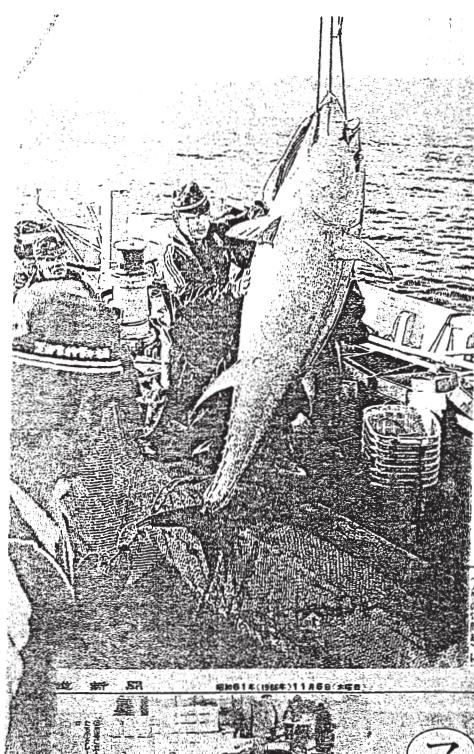
群衆

古平

空前、浜は興奮 しめて1億5千万円

変な賑わいとなり、昨年の大漁の再現を期待する声に浜は活気づいています。

昨年は家庭でのお正月用に、メジを一本買い置きするところもあつたようですが、家庭用として手軽に買える値段になつてくれる」とを期待する向きもありました。



逐

詠
主宰 水見壽男
〔八月号〕

雲切れて春月照らす船溜り

越野清治

山影の襞深くあり春の雲

峰の雪小さくなりて春惜しむ

堀典子

近づきてなほ艶なる路地明り
虚子祀る麗かなりし旅立ちに
旅半ば湯島は白き梅盛る

【句評】

山口悦子

花の香を添へて一筆誘ひ文

夕焼の移ろふ影や春の海
満天星の花鈴のごと紅ゆるる

渡辺嘉之

幾山河ふる里遠く花の頃
散り初めし花に名残や酒をくむ

本流も支流も春の川となり
春泥に風がつまづき日を零す

堀典子

積丹の原野自在に揚雲雀

踏青や浜風さへも青くあり

【句評】

渡辺嘉之

春の空白き鷗の透けて飛ぶ

番屋詠む悠々子句碑春の雪

【句評】

室谷弘子

新緑や牧の牛声空渡る

岬の波早春光に馴染みをり

【句評】

室谷弘子

若草に荒ぶ岬の生きいきと

春光わすばやく捉へ岬の波

【句評】

室谷弘子

碧い空気まぐれ風に奴風

春光に溺れてをりし岬の波

【句評】

室谷弘子

土くれに隠れ芽吹きしものあり

花辛夷潮の香に揺れ風に揺れ

【句評】

室谷弘子

高橋重子

想ひ出に捨てきれずあり春日傘
風の笛遠くに一人静かなり

到来の今日の食卓初饅頭

外山俊久

奴 達

—八月号—
[三七]

七月の羊蹄山青く鎮座せる 越野清治
沖つ波一帆走る雲の峰

網戸越し風が運んで磯便り 山口悦子
網戸越し横顔見せて二人連れ

蝸牛葉裏に潜み影淡し 越野敏雄
朝市の廻る干す蛸や夏の風

菖蒲湯や息子は還暦を過ぎにけり 大和田絵伊
夏海や浮球ゆらし子網立つ

浜風の庭にしつらふ藤の椅子 高橋重子

六月の潮風の町朝まだき

下駄の音浴衣に似合ふ男衆 外山俊久
五月晴歩けば風の友となる

老鷺の声こぼしつつ谷渡る 堀 典子

黒南風の踊るがごとく広がれり

明易き港に鼓動ありにけり 渡辺嘉之
短夜の岬の灯揺らす波の音

ほととぎす潮の岬を鳴きにけり 室谷弘子
ほととぎすさざめく渚見て鳴けり

散策の緑膨らみ濃く淡く 仲谷比呂古
頂上を目指す千人山開き

吉 平 伸 句 会

短歌 古平町岬短歌会

わが町の自慢の祭りの火渡りの天狗を見むとバスの人混む

池田テル

夏祭り浴衣姿も涼しげにそぞろに歩く乙女子たちは

金子寿子

夏の夕涼しさ誘ふ風鈴の音色に暑さひとつ和する

坂本信子

少女さびし孫らの遊ぶ線香花火うからと囲み盆を送りぬ

鈴木時子

久々に蝉の声聞く日日なれど暦はすでに立秋となり

田中香苗

遠く住む子の声受けてはづみたり帰るコールの知らせのありて

玉谷美都子

真夏日の続くに淋し未だ聞かぬうら山よりの蝉時雨の声

丹後初江

久々に帰省の孫と意気込みてキヤツチボールの夫は笑顔に

寺田カツ子

眠ること神秘に静まる神仙沼青きトンボの水面を飛び交ふ

仲谷喜美能

作業所の窓より覗く海底にぽつぽつと黒き海胆透けて見ゆ

堀典子

俳句 古平俳句会

遠山の雲動かざる夏の鴨

越野清治

耕して大地の鼓動裏返す

斎藤波留

汁の実が遂々背負ふ蘿の束

山口悦子

短夜のナースの胸のペントライト

越野敏雄

生きのびて五月の風に身を委ね

大和田絵伊

雨の中紫陽花の毬生き生きと

高橋重子

夏の海帆に風はらみ打瀬舟

外山俊久

鈴蘭や葉陰に白き鈴ならず

堀典子

山間のチャペルの鐘や風薰る

渡辺嘉之

鶯や岬へ孤独の老いを啼く

室谷弘子

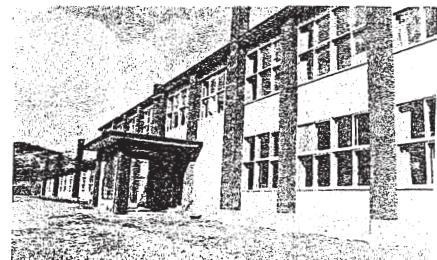
日をもらひ凜と天突く杜若

仲谷比呂古

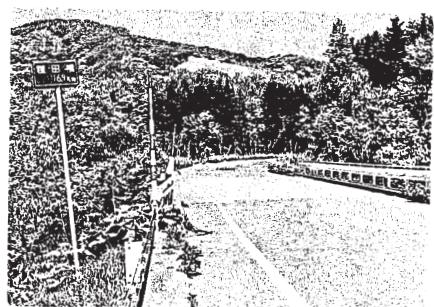
古平町史年表

昭和38年 (1963)

- 4/1 : 古平小学校新地分校が本校に統合される
- 同 : 古平町立古平高等学校が新地分校跡に移転し専用校舎となる
- 同 : 古平体育連盟が結成され、会長に越中庄七が選任される
- 同 : 北海道開発局が積丹国道調査資料を作成する
- 5/1 : 古平柔道同好会が結成され、会長に小椋 が選任される
- 5/24 : 回り淵の種田橋が破損落下し、稻倉石行きのバスが折り返し運転をする
- 7/24 : ニセコ・積丹・小樽海岸国定公園に古平町が指定される
- 8/3 : 古平漁業協同組合が既設の100トン貯油タンクを売却し、200トン貯油タンクを新設する
- 8/7 : 藤間きよし振り付けによる古平小唄の舞踊講習会が、新地町港会館で開かれる
- 8/31 : 大正12年から40年余りにわたって学校医を勤めた蓮実豊光氏が退職するに当たり、伊藤町長より感謝状と記念品が贈られる
- 9/11 : 古平高等学校創立15周年記念式と、合わせて独立校舎移転祝賀会が開かれる
- 9/15 : 町内対抗野球大会で新地町内会と浜一町内会が対戦し、3:2で新地町内会が優勝する
- 9/20 : 北後志五が町村の共同出資による伝染病隔離病舎が余市町に完成する
- 10/5 : 古平スキー連盟が結成され、会長に福井幸平が選任される
- 同 : 浅海増殖事業で、ワカメ・コンブ礁としてコンクリートブロックが浜町海岸に投入される
- 10/22 : 家畜センターのモデルとして建設された六志内農場に、寿都町から購入した肉牛20頭が放牧される



↑古平小学校新地分校を改修、竣工した古平高等学校新校舎



↑道道に指定新設された種田橋



↑国定公園指定の記念スタンプ



↑『古平小唄』の原本